

友杉 孝 著

『スリランカ・ゴールの肖像  
——南アジア地方都市の社会史——』

同文館 1990年 iv+308ページ

中村 尚 司

## I

スリランカは、小さな島国である。北海道の8割位の面積に、約1700万人が住んでいる。巨大なインド文明と比較するには、あまりに小さな島であるが、50万年前まで遡れる考古学的な遺蹟があり、紀元前3世紀以降は、文字による記録が残されている。その歴史と文化は、驚くほどの多様な側面を持っている。

先住民のウェッダ人は、20世紀に入ってから徐々に、固有の言語と生活様式を失いつつある。しかし、他の民族に受け継がれている文化遺産は、無視できないものがある。現代の多数民族であるシンハラ人の場合、キャンディ法が適用される高地シンハラ人と、ローマン・ダッチ法が適用される低地シンハラ人とは、社会組織のあり方が異なっている。少数民族の中で最大の勢力は、タミル民族であるが、北部州と東部州に集住するスリランカ・タミル人と、プランテーション労働者のインド・タミル人とは、出自や文化が違い、相互の交流が乏しい。ついで有力なマラッカラム人(ムーア人)には、イスラム法が適用される。彼らも東部州のパッティカロア県では多数民族である。このほかヨーロッパ系渡来人の子孫で英語を母語とするランシー人(バーガー人)や、ジャワ島から移住したマレー人も、固有の民族文化を大切にしている。20世紀初頭に中国の山東省地域から行商にきた商人たちも、華僑から中国系スリランカ人へと変貌しつつある。

小さな島国に、このように多様な民族が共存してきた歴史は、南インドやアラブ世界との交流と深く結びついているとともに、16世紀に始まるポルトガル、オランダおよびイギリスの植民地支配とも不可分である。そのため、さまざまな民族間の社会的な問題が発生している。しかし、今日のような形で、対立抗争が長期化し、大量の死者と難民を出すのは、1956年の公用語法の成立以来のことである。多数民族のシンハラ人政党が交替で政権

を担当し、少数民族のタミル人の不満が軍事的な対決にまで展開したのは、シンハラ語の公用語化によって、タミル語を母語とする人々が不利益に扱われるようになったからである。シンハラ人の間でも、植民地都市コロomboが支配の中心地となったため、英語を使いこなせず、西洋文化に馴染めない地方都市や農村住民の不満も大きい。

このような複雑な歴史的な背景と社会構成の研究は、国民国家単位で十分に扱うことができない。形のうえでは、公権力による住民の統合が完成した主権国家、という外観を持つので、スリランカを単一の社会として研究すると、多民族社会の本質的な問題が抜け落ちてしまう。アジアの旧植民地における地域研究に付きまとう、この難関を打開するひとつの実験的な方法として、本書の著者は古い植民地都市ゴールを取り上げ、社会史的な肖像を描こうとしたのである。正統的な歴史研究ではない、古典的な地誌の記述ではない、フィールド・ワーク中心とはいえ、人類学のモノグラフでもない。人間の背丈で測れる地方都市の経験を手がかりに、アジア社会を解説しようとする新しい方法である。

## II

本書の記述は、1983年夏の都市暴動から始まる。立ち並ぶ商店街の一区画が瓦礫の散乱と化している光景、現代が作り出した酸鼻な廃墟の写真が、第1章の「ゴールまで」の冒頭に掲げられる。この暴動を導入部において、都市研究の方法と意義が説かれる。なかでも商業活動に焦点を合わせて、都市の全体性に迫ろうとする意図が語られる。商業は、合理的な経済活動の機能的な一分野に止まらない。商業によって、地域社会はその外部から活力を導入する。そして、一定の歴史的条件のもとで社会統合は強化され、あるいは混乱させられる。だからこそ、商業は祭りに直接的に繋がっているのである。商店街での聞き取り調査の方法とゴール市の概要が紹介される。

第2章「街のかたち」の中心は、オランダ東インド会社によって築かれたフォートである。城壁に囲まれたフォートは、交易のための根拠地であり、植民地経営の司令部でもある。17世紀から今日に到るまで、外国との交易はフォート内部で行なわれ、生活必需品の売買は、フォートの外部でなされている。対外的な商業と対内的な商業の形成が、場所的に明確に区別されている事実、著者は注目する。そして対内的な商店街が、行商、

週市、常設市、の延長線上に、無人の境界地で形成されたことから、「諸共同体の果てる地」に始まる商業活動の特質を、都市の景観から読み取る。

第3章「さまざまな商い」は、都市ゴールだけでなく周辺農村にまで足をのぼし、商業活動の観察を続ける。インド産衣料などの外国製品を扱う商人は、オランダ人、イギリス人、ムスリム商人、南インド人などの、地域住民とは異なる文化に属する異人である。生鮮食料品が扱われる週市では、商人の異人性がいくぶん薄れる。著者によれば、「もっとも自然に近い生鮮食料品を底辺として、すべての商品は金細工装身具に収斂する」(103ページ)。商品の商品である金細工装身具は、社会の外部性を象徴し、都市と農村の社会的距離をきわだたせるのである。

商人の異人性に着目する著者は、第4章「商人の系譜」で、オリという下層カースト出身の商人について、詳細に考察する。伝統的な職業は、悪魔払いの儀礼劇の踊り子であり、土地なし労働者である。社会的に卑しめられたカーストから、植民地都市ゴールを代表する商人が登場する。1862年生まれのカニディ・ホセである。彼の系図が、7ページにわたって末尾に掲げられている。創業者の世代では、腕力や知力が社会関係を作り、孫の世代では、資産や教育が社会関係を規定する。

第5章「日常生活」では、繰り返しの自明性の社会制度が取り上げられる。記述の中心は土地制度と公教育である。続く第6章「祭りと商人」では、前章と対照的に非日常的な儀礼に焦点が合わされ、ウエサクやボソンの祭りを通して、表面から隠された仏教秩序のもとでの、古い拡大された社会を描きだす。社会の古層である仏教秩序が、非日常の事態に際して思い出され、現状を批判する正義感覚として機能する、というのである。

第7章「日常生活、ふたたび」では、日常的な経済生活の変貌と、儀礼劇、内乱、選挙等の非日常性が、てぎわよく対比される。それを受けて、終章の「ナショナリズムは昏迷する」では、ゴールにおけるナショナリズムを回顧するとともに、都市暴動と農村反乱の真只中に身を置きながら、市場経済の関連性を観察する。経済発展と武装蜂起が、社会を危機に陥れる、好戦的かつ排外的なナショナリズムに変貌する機構を吟味する。

商業が、社会にとって外部性であるように、権力もその始源において外部性であり、単なる暴力である。いちは正当化に成功した権力も商業活動同様、状況が変われば、社会の上層をおおう薄い膜にすぎないことを露呈する。そして、本書は次の結論に到達する。「分裂する

ナショナリズムは露骨に権力の外部性を暴く。権力の正当化に対する疑問を提出するのは都市である。しかし、疑問を力に変貌するのは農村においてである。このことは……経済発展のパターンに類似する」(276ページ)。

### III

農山漁村をフィールドとする調査研究には、長い歴史と蓄積がある。文化人類学、法社会学、農業経済学などの研究方法は、村のフィールド・ワークと切り離して考えられないほどである。しかし、都市をフィールドとする調査方法は、いまだ確立していない。全体像に到る道は険しく、先達を探すことも容易ではない。数少ない先達のひとりである鶴見良行氏による『マラッカ物語』が植民地支配史を基軸にしているのに対して、本書の著者は、商業活動を通じて地方都市を解明する方法を採用した。

商業活動の調査といっても、マーケティング・リサーチなどとはまったく異なる。行商から外国貿易までの、地方都市におけるあらゆる商業活動の歴史と現状を、丁寧に調査しなければならない。市場や商店街の景観から入る著者の方法は、いかにも人文地理学的である。参与観察の方法を重視する点は、人類学的である。商人の系譜を探るために、史料を集めてそのテキスト批判を行なう作業は、歴史学そのものである。しかしながら、終局的な目標は、社会関係の特質を明らかにすることである。本書が社会史という副題を持つゆえんである。

このような方法での地方都市研究は、始まったばかりであり、固有の方法を確立したとはいえない。いうまでもなく、本書はその先駆者的な試みである。地方都市の社会史的研究の方法が、近代に特徴的な国民国家単位の研究よりも、スリランカ社会の本質的な課題を正確に把握できる、といえるようになるためには、多くの課題が残されている。著者の調査自体が、コロンボの中央政府に対抗して、南部地域に根拠地を築こうとする人民解放戦線の反乱や、北部地域に「イーラム共和国」を築こうとするタミル解放運動をめぐる民族抗争に制約されている。コロンボ政府と対決するこのような運動は、地方都市ゴールを越えた広がりを持っている。

地方都市の商業活動の解明から、公権力が社会の外部性であることを明らかにする仕事は、しかしながら、著者の方法の優位性を如実に示している。社会科学の他の方法では扱いにくい難問に取り組んだ本書は、地方の商業から民族問題に接近する近道が存在することを教えてくれるのである。農村青年の反乱や民族暴動の激化に

ともなう、非常事態宣言下のゴール市におけるフィールド・ワークは、たびかさなる外出禁止令の布告も加わり、生命の危険さえ感じる状況も少なくなかったであろう。しかし、調査者にとっての困難な状況は、商業の外部性に関する研究を、権力（暴力）の外部性の解明に導く契機を与えたともいえる。その意味では、好運な状況であった。そのような困難と好運とを、見事に活かして、優れた成果を上げた著者に敬意を表したい。

スリランカに固有の用語について、気になる表記がいくつかある。版を改めるときに、検討いただければ幸いである。満月の日は、ホーヤ・ディ（Hoya Day）ではなく、ポーヤ・デー（Poya Day）とすべきであろう（31ページ等）。66ページに「地方役場を人格的に表現する

地方長官の公邸」とあるのは、“district office”と“government agent”の訳語であり、130ページの「地方長官」は、“assistant government agent”の訳語と思われる。スリランカ全島は、25 “districts”と280のAGA行政区に分かれる。前者の「地方役場」は県庁、「地方長官」は県知事が適当であろう。後者の地方長官は、ゴール県（district）だけでも16地区に分かれる行政区の長であるため、郡長とでも訳すべきであろう。254ページにある軍大臣は、郡大臣の誤植と思われる。しかし、これは“district minister”の訳語であるため、県大臣が適訳であろう。

（龍谷大学経済学部教授）